

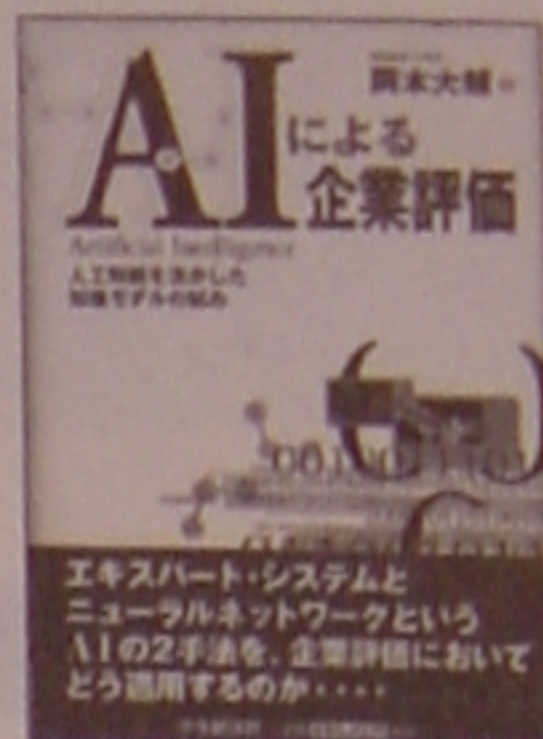
AI による企業評価

——人工知能を活かした知識モデルの試み

岡本大輔 著

(A5判・236頁・定価3,570円(税込)、中央経済社刊)

評者=十川廣國■慶應義塾大学教授



本書は、著者が長年にわたって取り組んできた企業評価に関する研究への挑戦的な試みである。著者は、『企業評価の視点と手法』を1996年に出版し、エキスパート・システムによる企業評価について研究成果を発表し、そのシステムの有効性と問題点を明らかにしている。本書は、この研究成果を受け、ニューラルネットワークの適用により、さらに現実的な企業評価モデルを発展させようとすることを目的としている。

本書の目的は、知識の取扱い方を企業評価という領域に限って検討し、より現実的な企業評価モデルを構築しようとするところにある。とくに著者は「企業評価という“良い企業とは何か”を研究する学問分野において、何を持って良しとするかという視点の問題と、如何にその良さを評価するかという手法の問題は車の両輪とも言うべき2大研究分野であるが、本研究では後者の手法の問題に絞り、人工知能の二手法を用いて如何に知識を取り扱うか」という課題に焦点があるとしている。

そこではエキスパート・システムとニューラルネットワークという人工知能分野の2つ手法の企業評価への適用が考えられている。両手法ともビジネス分野への適用例は少なく、それらについて言及する文献も数少ない。本書は、従来、ブラックボックスとして扱われてきた両手法の内部での機能にまで立ち入り、実際にどのような動きをするのか、それが企業評価においてどのような役割を果たすのかを検討しようとしている。つまり、単なる手法の考察に留まらず、それをどのように使うかという課題を財務諸表分析、倒産予測モデル、ホームセンター店舗経営力評価モデルによって具体的に検討しようとしている。

それは、正確な知識が得られ、表現でき、どのような場面にどのような知識を用いるべきか、がはっ

きりしているケースにおいてはエキスパート・システムが強力な武器となるが、知識の表現が困難であり、また情報が体系的でなく、不正確であるケースにおいては専門的知識の抽出・構築から始めなければならない、その際には自己学習能力をもつニューラルネットワークがその特性からみて、大いに有用であると考えられたからである。

実際に著者は前述のように現実の企業のデータによってその妥当性の検証に挑戦し、そのために自らプログラムを再構築するという困難な仕事をも成し遂げている。

こうした意味で、本書は極めて挑戦的な研究の成果であると評価することができる。しかし、評者なりに考えると、次のような点に不満が残る。ニューラルネットワーク適用目的の1つは企業経営における定性要因をどう評価モデルに取り込んでゆくかという点にもあったはずであるが、それに必ずしも成功しているとはいえない。たしかにホームセンター店舗に対するアンケート調査を行い、QAQF分析を通して経営力に貢献していると考えられる経営要因の抽出を試みている。しかし、そこで抽出されたニューラルネットワーク適用のための経営要因が著者の本来の主張である定性要因による企業評価に適切なものであったのかという疑問が残るからである。企業評価の研究では、視点の問題と、評価手法の問題は車の両輪としての2大研究分野であり、著者の目的が後者にあるとしても、企業を「何を持って良し」とするかについての検討つまり経営学的考察は、本書においてもある程度なされる必要があったのではないかという印象を持っている。おそらく、著者の力量からみて経営的考察とそれを基にした実証研究を継続することによって、より完成度の高い企業評価モデルの構築のための取組みが行われるものと推察している。今後の研究に大いに期待したい。